



石田勝彦句集「鷗」

ふらんす堂 一九九九 一〇 一〇

草刈つて来しわがペンの踊るかな

馬追や雨夜の子らにまつはられ

旅の夜の畳にはづめ木の実独楽

相違うて双つ顛頂の薄暑かな

多摩の野の大き日溜り達磨市

道濡れて春鮎釣がひそと居り

水中花夕青空の下に売る

高浪を風の離るる厄日かな

鶏頭のこぼせる種子の熱からむ

冬衾母の睡りを訪ふばかり

戻り来し妻の音して寒の入

苗束の双つ飛んだる水の空

渡岸寺

観音の臍見て返せ夏燕

余呉の鳶植田に魚を落しけり

冬空の一碧瀧を落しけり



聖夜劇モーゼの杖は子に倍す
小松菜の出荷菜屑の水辺より
青襟を立てし嶺々旧端午
沢蟹の木に登りをり盆夕立
夕鴨を見ての一本徳利かな
元日の日向ありけり飛鳥寺
不退寺の実南天また実南天
草餅や刈らずの丈の葭の夢
かたかごを引っぱる風の吹きにけり
水揚げの鯖が走れり鯖の上
浦島の眠りを眠る裸かな
小鳥来る説教台は一本足
餅搗のまだはじまらぬ臼と杵
落花はや流るる幹となりにけり
大岩のどこより降って夏の山



鶏頭の混み合つてゐる根元かな
猪鍋や暮れて背高くなりし山
雀の鉄砲田風に色を立て直し
遅き日や腹かへされし志賀の亀
若布干す香に突当り突当り
蟹の畑長茄子尻をあげにけり
棚ふくべゐしきに板をもらひけり
初枕吉備の夜長となりにけり
秋水を岩々起ちて送るなり
風の盆腹で胡弓をひきにけり
九頭龍は逆潮どきの秋あかね
一打より発す十夜の鉦の律
称名の解かずの拳十夜婆
寒牡丹菰の浮足立ちにけり
吹かれ立ち吹かれ立ちくる落花あり



妻の箸われに遅るる子持鮎

小鳥来て啄め妻のふさぎ虫

妻を喪ふ

妻ふつと見えずなりたる千草かな

色鳥やひとつ箆筥に妻のもの

やや寒の机は額の置きどころ

ひっかぶる布団露けくなりにつけり

ひつじ田のさみどりに茶の注ぎしぼり

一石の面魂や石路の花

瑞牆山風びかりしてゐたる

かぶらんと思ふは妻の毛糸帽

大揺らぎして落ちにけり冬椿

ひとり出てひとり帰るや龍の玉

冬鷗二階に声をかけてくれ

烏賊船の電球も磨きて年逝かす

野水仙てのひら燃えて戻り来し



白鳥の乗って氷の曇りけり

春浅し干し細りたる名無し魚

春浅し昼梟のひと声も

おのづから古茶の節目となりけり

初嵐雀の胸を借りにけり

秋風に牛の涎の曲りもせず

からまつを夜露の音のつたふなり

山芒衆を恃まぬものあり

ひとの世やけぶり立てをる十夜栗

冬はこべ風のとどまるところなし

うなだるとはこのかたち敗荷

田雀は篠に戻りぬ小正月

一園の椿五衰に入りけり

大寺にして芳草を踏ましめず

草につく落花と水につく落花



老鶯や干潟を水の貫きて

天幕に日が射し込んで祭酒

松風に研がるる蟻となりにけり

われならぬ息のきこゆる青芒

眼が裂けてをる炎天の鷗かな

青芦の伸び足らざるはなかりけり

露の牛背骨に皮のひっかかり

鳶の腹木の葉あらしの中に見ゆ

ホロビッツ指が寒しと言ひにけり

終

